

日本茶道の原点「そそう」－珠光・紹鷗・利休の茶－

朴 珉廷

はじめに

従来、茶の湯研究においては「わび」「さび」が重視されてきたが、「そそう(麴相)」がそれに劣らぬ重要な理念であることを私は指摘したい。「そそう」は普通には、細やかさのない、荒々しい様子などを否定的に語る際に用いられる言葉であるが、数寄茶湯では逆に「茶の理想的姿」であり、かつ「哲学」として数寄道具を選ぶ基準にもなっており、茶の湯全般にわたって肯定的に強調されていた。ここでいう「数寄茶湯」とは、珠光を開祖として武野紹鷗、千利休の茶道に受け継がれたもので、茶禅一味の茶道観に基づくとともに、日本伝統芸術における風体論の伝統をも受け継ぎ、また四季折々の自然と共にする自然観が溶け込んであらわれた茶湯を意味する。このような意味での数寄茶湯を本稿では「茶道」という言葉で置き換えて用いる。

数寄茶湯の姿や哲学は「そそう」というキーワードに集約されていた。数寄茶湯を伝える茶書『山上宗二記』(一五八八)の中では、茶人の在り様をはじめ、亭主のもてなし、懐石、茶室、灰形、取り合わせの在り様に至るまで、茶湯を成り立たせる重要な諸要素について「そそう」が唱えられていた。当然ながら「そそう」は数寄茶湯を代表する三人の茶人、珠光・紹鷗・利休ともかかわっていたのである。

本稿では、先ず数寄茶湯を伝える茶書『山上宗二記』における「そそう」を紹介し、次に数寄茶湯を代表する三人の茶人、珠光・紹鷗・利休に関わる「そそう」について述べたい。そして「そそう(麴相)」の「そ(麴)」の、芸論における「麴妙」との関係にふれたい。

1. 「そそう(麴相)」とは

元来「そそう」は、今も嘗ても「あらい」「粗末」「不始末」など、否定的な意味を表わし、今の茶道の現場でも「そそうのないように」とは言うが、「そそうになるように」とは決して言わないほど、否定的な意味合いが強い。ところが、『山上宗二記』には、茶人の心得を伝える最も大事な項目である「茶の湯者覚悟十体」「又十体」に、「そそう」が積極的に唱えられていることが確認できる。『山上宗二記』は周知のとおり、利休の茶の湯を伝える一級史料としても高く評される⁽¹⁾ 茶道文献である。ここに「そそう」の用例は全部で六箇所に見られるが、このすべてにおいて、「そそう」が茶道を形成する肝心な要素であるとされていることが注目される。

1. 1 茶道の理想的姿としての「そそう」

ここで、日本の茶道を形成する大事な要素には何があるかと問われた場合、なんと答えられるだろう。見方によってその答えはさまざまであろうが、茶道の姿という観点から考えて

いくと、まず茶を行う主体の茶人、そして茶室、もてなし(礼儀作法、点前、趣向などを含む)、懐石、取り合わせなどが、おそらく共通の認識となるのではないかと思う。日本の茶道の姿が大成される時期に執筆された『山上宗二記』には、上記のような要素に対して、一貫して示す一つの言葉は「そそう」であった。すなわち、茶の湯の姿、在り様は、「そそう」であるようにというのである。具体的には次の通りである。(原文引用は『茶道古典全集』『山上宗二記』淡交社)

- 一、 茶人の在り様としては、「上をそさうに、下を律儀に」
- 二、 もてなしの在り様としては、「貴人茶湯ノ上手ノ事ハ不及申、不断寄合衆ヲモ名人ノコトク、底ニハ可思。将又、上ヲハそさうに可仕」
- 三、 懐石の在り様としては、「物ヲ入テソサウニミユル様にスルカ専也」
- 四、 茶室作りの在り様としては、「准会席、物ヲ入テソサウニスルカ数寄之作事也」
- 五、 灰の在り様としては、「角々手きはを真ニ入て、そさうにミゆる様に灰をいるゝ也」
- 六、 取り合わせの在り様としては、「昔、珠光被申候ハ、ワラヤニ名馬ヲ繫タルカ好ト、旧語に有時ハ、名物之道具ヲそさうなる座敷ニ置キタルハ、当世の風体、猶以面白歟」

まず、茶人の在るべき姿として、「上をそさうに、下を律儀に」と示されている。ここでいう「上」「下」とは、茶人の外面と内面を表している。外面の姿をそさうに、内面の心を律儀にということである。「律儀」とは、礼儀正しく正直に、道理にかなうという意味なのである。ここで誤解されやすいのは、多くは、人間関係における「上」「下」として捉えられがちなのである。ところが、『山上宗二記』に繰り返し強調されている「茶禅一味」の茶道観に⁽²⁾ 基づいて考えると、「上」「下」は、茶人の在り様としての「外面の姿」と「内面の心」として、捉えるのが妥当であろう。しかも人間関係における「上」「下」については、次のもてなしのところで明白に示されているからである。

次に亭主のもてなしの在り様として、「貴人、茶湯の上手の事は勿論、普段付き合う人でも名人のように心には思うべし、しかし上をばそさうに」と示している。社会的地位や人間関係の上下においての、上なる人に対してはもちろんのこと、そうでない人に対しても、「内面の心」では名人を迎えた心得で、しかしながら「もてなしの姿」は「そさうに」しなさいという意味である。

また、懐石の在り様として、「物を入れて、そさうに見えるようにするのが専なり」と示している。「物をいれる」とは、費用、手数料がかかるという意味合いで、豪華な材料を使っても、そさうに見えるようにすることを善しとするという意味である。

そして茶室作りの在り様としても、「懐石に倣い、贅を尽くして建てたとしても、そさうに見えるように茶室を作るのを善し」としている。上記の懐石料理や草庵茶室の作りを思い起

こせば、よく分かることと思う。なお、灰形をつくる時も「中身を隅々丁寧に調えるが、姿はあくまでもそそうに見えるように」と説いている。

最後に取り合わせの在り様についても、「昔、珠光が藁屋に名馬と言ったように、名物道具をそそうなる茶室に置く取り合わせは一層面白い」などと示している。このような取り合わせの姿を面白いと判断したのは、利休によって、はじめて小座敷に名物を置き始めたという背景があるからであろう。

このように、理想的茶人の在り様をはじめ、もてなし・懐石・茶室・灰形・取り合わせの在り様に至るまで、茶湯の全般にわたって、一貫して示す一つの言葉は、「そそう」であった。

もちろん、ここでいう「そそう」は、一般的にいう、してはいけない悪い「そそう」ではない。肯定的にあるべき姿としての善き「そそう」を意味するのである。善き「そそう」の姿は、単なる表面的な姿を指すものではなく、その姿には必ず「心」、即ち茶を行う主体の内面的なものを伴っている「自然体」という意味合いで捉えられる。この「自然体」という意味は、自然界のあるがままの自然ではなく、人の手が加わった、いわゆる文化的なものでありながら、しかも自然のことわりに適ったものでなければならないという意味で、「自然体」^{じねんてい}を指している。だから『山上宗二記』唱えている「そそう」とは、善き「そそう」として、数寄茶湯の原点において茶の理想的姿としてとらえられるべきと私は思う。

1. 2 茶道の哲学としての「そそう」

上記で「そそう」は、善き「そそう」として、茶道の理想的姿、すなわち「自然体」を意味すると捉えた。しかし、「そそう」は単にうわべの姿だけを表しているのではない。その姿は内面の心、すなわち心の境地から出てくるものとして、目指す方向が自然体としての「そそう」であるということから、茶道の実践哲学として捉えるべきといえよう。

「そそう」が登場する際には、必ず「上の姿」とともに、「下の心」、表には見えにくい裏方の在り様が条件付けられていた。例えば、茶人の在り様として、「上をそそうに、下を律儀に」とあるように、下の心が律儀であることが前提としてあってこそ、上の「そそう」が「善きそそう」になる。また、亭主のもてなしを説く際でも、普通の茶人を迎えた場合、心の中では本当に名人を迎えたような心得で、「そそう」にもてなした時こそ、「善きそそう」になるのである。逆に貴人や名人を迎えた時に、一般にいう「悪しきそそう」でもてなしをするということになれば、それこそ不敬、不遜になるわけである。だから、心の底においては礼を尽くしながらも、うわべの姿は「自然体」でもてなす。この「自然体」でもてなすことは、頭では十分わかったつもりでも実際は難しいものである。なぜなら、心に我慢我執の塵が一つも無い清浄無垢(無・空)の境地になってこそ、おのずから本当の自然体ができてくるわけだからである。そこで心の修行、「茶禅一味」の茶道観が強調される所以がある。禅を要として却来した「自然体」としての「そそう」は、「守破離」⁽³⁾でいえば、守にも破にも、何にもこだわらない「離」の境地、「自由」の哲学ともいえよう。

2. 「そそう」と珠光・紹鷗・利休

「そそう」は、数寄茶湯を代表する三人の茶人、珠光・紹鷗・利休と肝心な場面でかかわっていた。

2. 1 珠光の「そそう」

珠光(1423~1502)は、『山上宗二記』の著者山上宗二(1544~1590)によって「数寄茶湯の開山」と讃えられた。その背景には、大徳寺の一休宗純(1394~1481)に参禅し、その印可(悟りの証明)の証として、臨済禅の第一の書といわれる『碧巖録』の著者円悟克勤⁽⁴⁾(1063~1135)禅師の墨跡をもらい、それを自分が創案した四畳半茶室の間床にかけて禅茶を行ったといわれる。山上宗二は、円悟の墨跡を「禅宗の眼」と位置付けていた。そのため、珠光のそういう茶の湯には「仏法もその中にある」と能阿弥の言葉を通して伝えている。ここに茶禅一味の茶道観に基づく数寄茶湯の開山と崇められる所以があるといえよう。ただし、珠光にかかわる珠光伝は伝承の域を出ないものが多く、一休への参禅のことも同様である。

さて、珠光は、茶湯の名人として数多くの唐物名物を集めていたが、それをだんだん手放していったという。しかし、「^{なげずきん}抛頭巾」茶入だけは臨終まで手放さずに最も大事にしたと伝えられる。そして死に臨んで、自分の忌日には円悟の墨蹟を掛け、抛頭巾茶入にヒクツ茶を入れて茶の湯を手向けよと遺言したという(『山上宗二記』)。なぜ、珠光は死んでからもこの茶入だけは手放さなかったのであろう。

「抛頭巾」という茶入銘は、珠光がそのあまりのすばらしさに感嘆して、着けていた頭巾を^{なげう}抛ってしまったという説と、その姿が抛られた頭巾のように歪んでいることからという説があるが、いずれも歪みの姿として捉えられよう。ところが、この歪みのある抛頭巾茶入を「そそう」と鑑定している茶会記がある。堺の茶人津田宗及(?~1591)による『宗及他会記』である。そこにはこの茶入の拝見の詳細な記録が書かれており、最後に「そそう」と鑑定されている。

永禄十年二月七日朝 了二 道叱 宗及 二人

なげつきん拝見申候、つほおよそ如此候坎、へら四ツ有、浦の方へら一段ゆかミ申候也、面のへらに、おしいれたつやうなところ有也、土少白色也、一段こまかに申候、くすり黒候也、口のうちへも、くすりまはりたる也、かたにつくろい有、ひねりうすく候也、くすりこまか也、口立のひたる也、かたゝれさかりたつ也、上くすり下くすりとのさかい、上くすり白色なところ有、かたにかたさかり有、いつれも惣別そさうに覺申候、口のすち一段ふとく候、ふた平つく也、うらきんはくにてたミ申候、同所二而、しゆくわう茶わん拝見申候、へら廿六有、いとそこ立候也、中二福といふ字有、惣別、茶わんておもく候也、

抛頭巾茶入は、四つのへらめによるゆがみと押し込みの様子に特徴があり、土は細かく薬

は黒色であるが、その葉の掛け具合やなだれの様子からして、全体的に「そそう」に見える
と評されている。残念ながら、この茶入は現存してないので、その姿を確認できない。こ
こで注目したい大事なところがある。抛頭巾茶入の詳細を書いた津田宗及と山上宗二は格別親
密な関係であったので、宗二はこの茶入が「そそう」と評されることは当然知っていたと推
定される。しかし、宗二は、『山上宗二記』に「抛頭巾」茶入を紹介するとき、「そそう」と
いう言葉を用いなかった。代わりに、「数寄の眼」という最高の鑑定を与えることによって、
この「そそう」なる茶入こそが、最高の数寄道具であることを逆説したかったのであろう。

かたつき 堺もすや宗安ニ在、珠光のなけつきん、へらめ四つ有。むかふに一ツ、上下一文字ニ、ヲシコミヘラアリ。其内ニナタレ色葉在。惣ノ葉ハコイアメ也。珠光、始新田、次ニ宗及文林、其後小茄子所持候。此壺カヘカヘ放候テ、果ニ此ナケツキン、彼円悟一軸、死去之後迄アリ。宗珠ニ被申置候ハ、忌日ニハ此一軸ヲ懸テ、ナケツキンニヒクツヲ入、茶湯ニ可仕由、被申置候。惣別、数寄ノ方ニハ此一種、ナラシハ数寄ノ眼也。
(『山上宗二記』)

このように、珠光は「そそう」と評される「抛頭巾」茶入を、死んでからも数寄を楽しむ道具にしたかったのである。『山上宗二記』に「古人之曰、茶湯名人ニ成ての果ハ、道具一種サヘ樂ハ、弥佗数寄カ専也」というが、珠光はその典型的な模範を見せているといえよう。『山上宗二記』では、茶人を大名茶の湯、佗び数寄、茶の湯者、そして名人と四つに分類している。そこで名人とは、唐物を持ち、目聞きで、茶湯も上手であること、そのうえ佗び数寄の条件とする胸の覚悟一つ、作分一つ、手柄一つを調べ、一道に志深い茶人をいうとある。その意味で珠光はすでに名人であったが、名人になってからはどんどん唐物を手放してゆき、最後は抛頭巾茶入一種を死後までも楽しもうとしたのである。それが、「そそう」と評される道具であったことに注目すべきであろう。

もう一つ注目すべきところがある。それは、珠光の遺言における取り合わせの在り様である。「禅宗の眼」と評される「名物」の「円悟墨跡」と「数寄の眼」と評される「そそう」の「抛頭巾」茶入との取り合わせである。これは、「名物」と「そそう」との取り合わせの在り様として、「昔、珠光被申候ハ、ワラヤニ名馬ヲ繫タルカ好ト」に当たる最初の事例になろう。そして『山上宗二記』において「名物之道具ヲそさうなる座敷ニ置キタルハ、当世の風体、猶以面白歟」に受け継がれるのである。これについてはのちに利休の「そそう」のところでふれたい。

2. 2 武野紹鷗の「そそう」

武野紹鷗(1502~1555)は日本茶道の中興として崇められる茶人である。彼が創り出した袋棚は「そそう」と深いかわりをもっている。『南方録』の「棚」においては紹鷗袋棚⁽⁵⁾が半分以上を占める。どういった理由で紹鷗棚が重要視されたのか。『南方録』「棚」によると、紹鷗は歌を作って袋棚に秘事があると常言していたとされる。

○袋棚をこしらへたる、これ紹鷗に初る、此後、置棚あまた出来候へとも、袋棚に過たる棚なし、かね、よろづととのひて、臺子及第にもおとらぬ棚也。紹鷗の歌に、

我名をは大黒庵といふなれば

袋棚にぞ秘事はこめける

かやうに秘蔵して常住に用られし也

(『南方録』53頁 淡交社 昭和50)

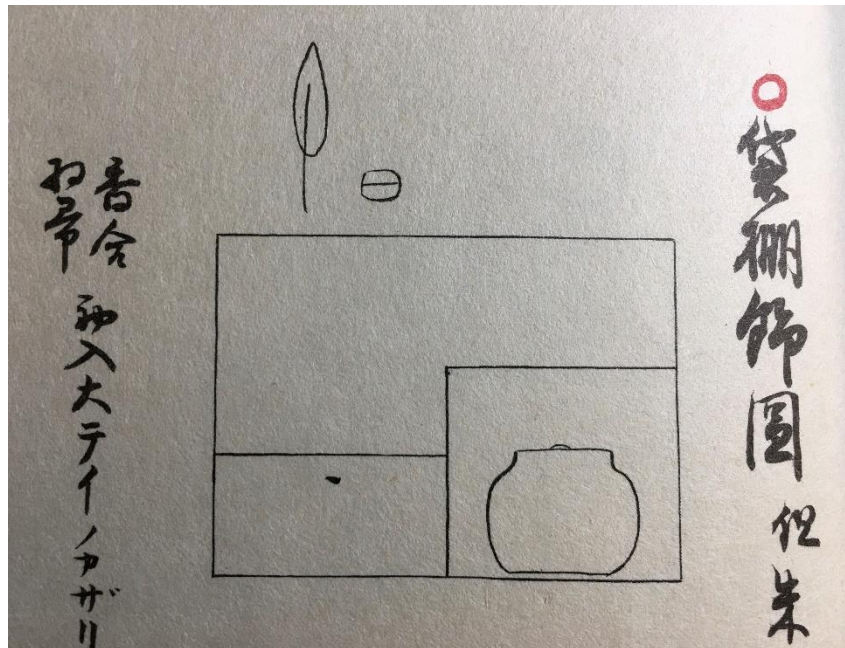
では、紹鷗の袋棚はどのようなものであったのか。

○袋棚ハ、書院クサリノ間、平座敷、小座敷トモニ用ユ、書院ニハ凡ウスヌリヨシ、

(書入) 木ノ目見ユルヤウニ、ウスウストヌリタル袋棚アリ、木地同前ナレトモ、手前ニハ少心用違コトアリ、茶巾・敷紙等ノ類也。物置モ心モチニテイクツニモ也。アラマシ図ニ出タリ、物数スクナク、メヅラシキコトナキヤウニカザル事専一也。

(書入) 袋棚伝授ノ切紙ハ、紹鷗ノ伝ノママナルウツシモアリ、又休ノ作分モアリ、

(『南方録』53頁 淡交社 昭和50)



紹鷗袋棚『南方録』影印本

紹鷗によって創作された袋棚は木地同然にするか、^{ぬり}塗をかけても木目が見えるように薄塗にするようにとある。これは結構な塗を避けていたことを証明する。これを裏付ける記録として野村宗覚宛の利休伝書がある。野村宗覚は利休と交流のあった歴史的な人物としてその子孫は代々徳川家の茶道師範を勤めて明治まで茶道家として名が通った。これによると、香

を特に好んでいた紹鷗は香を生かす棚を作って、自分の号「大黒庵」にふさわしく、大黒神が愛した袋にちなんで「袋棚」と名付けたという。紹鷗は数寄の道即ち茶道をたしなもうとする人は袋棚の数寄を鍛錬すべきと強調している。

紹鷗老、殊の外香をきく事自慢して、袋棚を作り出し、大黒庵とよばれ給ひし也。大黒は袋を愛せし人なれば也。これによって袋棚の書物の奥書に、紹鷗老一首の狂歌に、

わか名をば大黒庵といふなれば

ふくろ棚にぞ秘しとこめける

と読み給ひし也。此道をたしなむべき人は、袋棚の数寄をたんれんすべし。

(千宗守『利休居士の茶道』「野村宗覚宛利休伝書」藝文書院 昭和 18 220 頁～221 頁)

紹鷗は袋棚には数寄の秘事があり、袋棚の鍛錬が茶道を学ぶものに大事であることをいう。袋棚の創作時に特に意識したのが「結構」にせず、「そそう」にすることであった。それは塗りもせず、蒔絵もせず、「結構」を避けることによって、物数寄(茶道)は「そそう(麁相)」なるところにあるという名言を遺したのである。このように紹鷗は「^{そそう}麁相」という語で、茶湯の真髓を伝えようとしたことがうかがえる。

紹鷗老、袋棚を作り給ひし時、名言あり。袋棚を或は塗り、或は蒔絵し、結構にはすべからず、其儘の板にて、麁相なる所に物数寄はありと宣へり。

(同上 228 頁～228 頁)

更に肝心なのはこのあとのところである。紹鷗が「麁相」を強調していることに対して、利休は、「麁相にしてきれいに」と言葉を付け加えた。そして結構にするのは数寄道には用い難いという。

総じて、物数寄と云ふは、麁相にして綺麗に、りこうなるを云ふ也。結構にこしたる事は、数寄道には用ひがたし

(同上 228 頁)

この際、「けっこう」はきらっていたが、「きれい」は善しとされていた。この「きれい」は、「茶の湯者覚悟十体」においても「きれい数寄、心の中猶以専也」とあるほど、「上をそそうに、下を律儀に」とともに、茶人に高く求められる心得であった。利休は、紹鷗が最も大事にした善き「そそう」に、この「きれい数寄」の「きれい」を付け加えることによって、数寄茶湯における「そそう」の神髓を正しく伝えたかったとうかがえられる。

「麁相にして綺麗に」という表現の構図は『山上宗二記』のそそうの構図と共通性が見られる。「上を麁相に下を律儀に」、「上は麁相に底は名人のごとく」「隅々真を入れて上はそそ

うに「物をいれて上はそそうに」の表現がそれである。そこで、宗二と利休における茶の同質性が感じさせられる。

2. 3 利休の「そそう」

利休が紹鷗袋棚について「麁相にして綺麗に」という言葉を遺していると述べたが、利休には「そそう」にかかわるもう一つの伝書があるので、それを取り上げよう。

先項の「珠光のそそう」においては、珠光が自分の忌日に抛頭巾茶入とともに円悟の墨蹟をかけて手向けるように遺言を残していたと述べた。この円悟墨蹟は、珠光が一休和尚に参禅した時、印可の証明として与えられて、茶室での墨蹟掛けの始まりになったと伝えられている。『山上宗二記』によると、この墨蹟を堺の茶人伊勢屋道和が所持していたという。道和が円悟墨蹟を手に入れる時のエピソードが松屋宛ての『利休居士伝書』に伝えられている。

道和は円悟墨蹟を入手するに際して利休の意見を聞いた。ところが、利休は初めは「あなたは大きな立派な家に住んでいらっしゃるから、この墨蹟は似合いませんよ。」と言って賛成しなかった。ところが道和が火事にあって、彼の家が焼けてしまった。家を再建した後に、道和はまた利休に、「やはり珠光円悟がほしい」と相談したところ、今度は利休は、「火事に遭われて、家が少し麁相になったから、どうぞお買いなさい。」と入手に賛成し、さらに「これは珠光が亡くなる時に掛けていたもので、寮舎の端などを囲って数寄の茶をする人に似合うものです。」と言ったという。

堺伊勢屋道和といふ者、圓悟ノ墨跡を取申度と易へ問バ無用といふ。道和申候ハ、銀子十貫目に売可申と申候間、其ハ調安候と申セバ、易ノ云貴所ハ家なども三階作、表の隔子杯も美々敷候間中々無用と也。又其後ほしき由を申セバ易云、今ハ火事ニ御逢候て、家なども少そさうニ候儘御取候得。是珠光末期懸しものなり。りやうのはしなどかこいて数寄する人などに似相たる物体と云。則道和所持して後ニ大徳寺へ寄進するなり。

(『解説 茶道四祖伝書』 校註松山米太郎 昭和8 秋豊園 45頁)

円悟墨蹟はいうまでもなく唐物名物である。その法語は「禅宗の眼」とされる。数寄茶湯の開祖である珠光は死後も自分の忌日にはこの墨蹟を掛けてほしいとの遺言まで残している。この名物の軸を、「結構」なところではなく、「麁相」になった囲いに取り合わせしようとする。

この取り合わせは『山上宗二記』における「名物道具をそそうなる座敷におく」という教えを思い浮かばせてくれる。この逸話の歴史的事実関係はさておいて、利休の愛弟子であった宗二の「そそう」と、利休の逸話に登場する「そそう」の考え方がまったく相通じる同質性があるといえよう。例えば「そそうにして綺麗に」は「上はそそうに下は律儀に」に、「円悟墨蹟をそそうなる囲いに」は「名物道具をそそうなる座敷に」にと重ねて考えて何の差支えもないほど、「麁相」を掲げての考え方は同様に見える。

以上、茶道の名人にかかわる「そそう」と『山上宗二記』における「そそう」と重ね合わせて考えると、「そそう」は茶道の一番肝心な「姿」かつ「哲学」と考えられる。

3. 善き「そそう」になる条件としての「妙」

「麁相」の辞書的な意味は周知のとおり、「粗末」「不始末」「粗い」「荒い」などである。しかも今も嘗ても殆ど否定的な意味は変わっていない。では、普通にいう悪しき「そそう」と区別できる善き「そそう」の条件とは何か。そのヒントになるものとして、「麁妙」論にふれたい。

「麁相」の「麁」について、仏教書では「妙」と合わせ用いられる例が少なからず見られる。特に、『法華経』の注釈書である『妙法蓮華経玄義』や『法華玄義釈籤』などで多く見られるので、ここでは天台宗の注釈書において「麁」と「妙」の相関が見られるところを四箇所紹介したい。

㊶天台宗『法華玄義』卷二上

妙名不可思議。不因於麁一而名為妙。

㊷伝最澄『天台法華宗牛頭法門要纂』第一鏡像円融

如大論云、三智実在一心中、是微妙淨心淨境、非麁細染心染境

㊸伝中尋『法華略儀見聞』

隔歴三諦麁法。円融三諦妙法 此心地。

㊹伝最澄『修禅寺決』止観大旨於徳門入機有五種

一、捨麁入妙機 二、住麁即妙 三、唯妙無麁機 四、住妙還麁 五、非妙非麁円人

未だ正確な解釈には至っていないが、「麁」が「妙」と相関にあることには興味深い。特に㊹の伝最澄『修禅寺決』止観大旨は修行の過程乃至段階と見られる。「麁妙」の相関が「麁」・「妙」共にそれを超えたところに至ってこそ、真の円人であるという。㊹の四の「住妙還麁」は「妙に住して麁に還る」とよめるが、ここの「還る」は世阿弥が『九位』⁽⁶⁾でいう、至極の「上三花（妙花風）」に至って「却来」して「下三位（強細風・強麁風・麁鉛風）」へ下ることを述べるところと共通しているといえよう。つまり、元来の「麁」そのままではなく、至極のところの「妙」に至って却来したところでの「麁」をいうのであろう。これが善き「麁」なのである。

これについて言及している金春禅竹(1405~1470)も次のことばはたいへん興味深い。

無上の位には二つの位、一つ、しづかなる位（妙位）、いま一つ、あれたる位（麁位）

『歌舞髓脳記』

とある。つまり無上の位には「妙」と「麿」との二つがあり、それを同等に捉えているのである。もちろんここでの「麿」は善き「麿」でなければならない。そして「あれたる位」について、

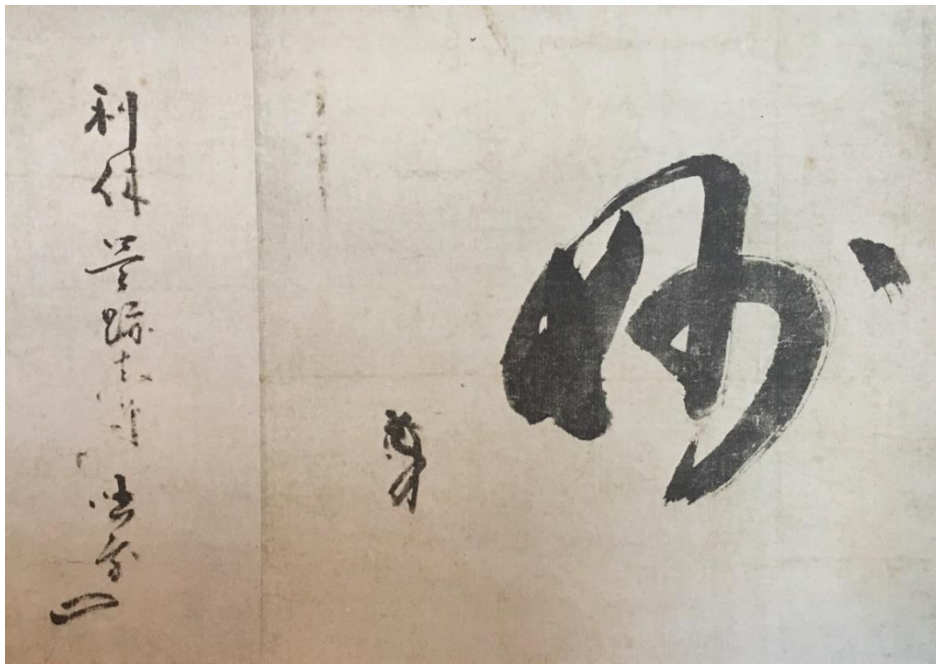
人もかよわぬ興津しほあみのあかつきの声、身に知られて哀也。幽なる所より、わざとあれたる位、無上妙果真曲の所催なり。此麿妙のしなをわきまふべし。

『歌舞髓脳記』

と説いている。また続いて、

此あれたる位について心うべし。おなじやうなれども、あれたるとあらきとは、心かはるべし。至極無上之真曲に至って、わざとあれたる風体は妙なり。根本あらき物は、たゞあらきのみなり。根本閑静なる所より、かりにあれたるは、しづかなるよりも、又感あり。

と述べている。



千利休筆 妙一字

禅竹は「麿」と「妙」について、元来のなまの「麿」は、ただあらきもので、悪しき「麿」と言っている。それが「妙」なる位に至って「あえて」、「わざと」あれたる風体は、「妙」の風体になるのだという。さらにしづかなる所、即ち閑寂なところより、わざとあれたるは、閑寂な「妙」よりもさらに「感動」があり面白いという。善き「そそう」はまさにこの段階

を経たものを条件とする。つまり、「妙」からおのずから、あるいはわざと表す「匱」なのである。

善き匱相の「匱」は「妙」とかかわっている。「匱相」が悪しきそそのの意味ではなく、善きそそのとして肯定的になり得るのは、「妙」に至ってそこから更に進み、わざと匱相を出すことによって、その匱相はもう匱でもなく妙でもない新しい境地の善き匱相といえよう。

おわりに

数寄茶湯を伝える茶書『山上宗二記』における「そそう」、および数寄茶湯を代表する三人の茶人、珠光・紹鷗・利休に関わる「そそう」についてふれてきた。どちらも数寄茶湯の姿や哲学を伝えるキーワードは、一貫して示す一つの言葉は「そそう」であったことが確認できた。

『山上宗二記』には、茶を行う主体である茶人の在り様を始め、もてなし、灰形、懐石、茶室、取り合わせに至るまで、日本茶道を構成する肝心な諸要素のあるべき姿を「そそう」と言表した。「そそう」の特徴としては、取り合わせの在り様を除いて、必ず上と下、上と底、内面と外面、過程と結果、中身とうわべというように、表現上は二元的になっている。しかし、体と心とが、理論的には二つであっても実際は一つでつながっているように、「そそう」も姿とその境地は一体となっている。目で見えない心の境地では「律儀・真・物入り・名人」という「妙」を備えたうえに、姿では敢えて「匱」にすることによって善き「そそう」へと転換した。

このような善き「そそう」は、「数寄の眼」として、数寄道具を選ぶ基準にもなった。珠光の茶の湯においては、「抛頭巾」茶入がそれであった。紹鷗の茶の湯においては、蒔絵もせず、塗もしない「袋棚」がそれであった。利休は紹鷗の「そそう」を補って「そそうにして綺麗に」と『山上宗二記』に相通じる考え方を示していた。なお利休は、善き「そそう」を「結構」に相対するものとしてではなく、対等・平等と捉え、「唐物名物をそそうなる座敷におく」境地まで表していた。

善き「匱相」になる条件を「匱妙論」から説いていくと、先ず「妙」に至って、その「妙」からわざと「匱」を出した時は、善き「そそう」になると述べた。ここでいう「妙」の意味は、静か、閑、幽玄、無、空などと置き換えられる。倉澤行洋博士の「茶道」の二段階の定義で言えば、第一段階の「至心に入り」、そして第二段階の「至心から茶への道」において顕われる姿といえよう。修行の「守破離」論で言えば、守にも破にも執着しない離の境地からの姿だと捉えられよう。

このような善き「匱相」は「自然体」の姿として捉えられる。ここでいう「自然体」とは、東洋で求められ続けてきた自然との一体の境地の表れでもある。このような意味で、「匱相」は東洋人文学の理念である、姿と境地の両面にわたる高い実践哲学として見られるであろう。そういう意味で「匱相」は、茶道に限らず、その背景にある茶禅一味の茶道観は人生哲学として、日本伝統藝術論を基盤とした風体論は芸術哲学として、四季折々の自然と共にする自

然観は人間と自然との関係を考える文明哲学として示唆するメッセージがあるように思われる。

(韓国・西京大学校日韓芸術文化研究所 特別研究員)

【注】

- (1) 桑田忠親「解題」『山上宗二記』『茶道古典全集』第六巻 講談社
- (2) 「茶禅一味」の茶道観が見られる。具体的な内容として第一、珠光の茶の湯には「仏法もその中にある」ということ。第二、武野紹鷗のいう「茶味と禅味と同じうすることを知る」。第三、「茶湯の風体は禅宗よりでる」と繰り返されることである。参照：朴珉廷 (2019)『そそのの哲学—数寄茶湯の原点』思文閣出版
- (3) 芸道における修行の三段階を表す概念。「守る・破る・離れる」という意味合いで、特に茶道や武道などの修行によく用いられる語である。
- (4) 宋代禅林の巨匠で、高宗より圓悟の号を賜ったので、圓悟禅師と敬称される。円悟はふつう圓悟と表記されるが、ここでは円悟の表記を用いる。主な弟子に大慧宗杲(1089~1163)・虎丘紹隆(1077~1138)の二人がいるが、日本の臨済宗各派の本山はすべてこの虎丘の法系に属する。その意味で虎丘ひいて円悟は、日本の禅宗にとって極めて重い位置にある人である。参照：倉澤行洋「珠光の印証書 圓悟墨蹟—茶道と禅—」『国際伝統芸術研究』1号
- (5) 『南方録』における「紹鷗袋棚」は現在、利休好みの袋棚とされているが、その理由は明らかでない。
- (6) 世阿弥の晩年に書かれた能楽における最高の風体修行論書である。